

RomeoとJulietについて

その他（別言語等） のタイトル	A Study of Romeo and Juliet
著者	狐野 利久
雑誌名	室蘭工業大学研究報告. 文科編
巻	10
号	3
ページ	331-361
発行年	1981-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10258/3387

Romeo と Juliet について

狐 野 利 久

A Study of *Romeo and Juliet*

By Rikyu Kono

Abstract

Generally speaking, *Romeo and Juliet* by Shakespeare is regarded as a tragedy on “the predestined victims of a malicious Fate” as George Ian Duthie says in the Introduction of *Romeo and Juliet*, one of the series of the *New Shakespeare* published by Cambridge University Press. Middleton Murry also says in his *Shakespeare* (pp. 186-7) that “it is only the tempest of circumstance which wrecks the life of Romeo and Juliet....They are the victims not of their passion but of crass casualty; they are fortune’s fools, not their own.” I cannot assent to them: I prefer to say that Romeo and Juliet are silly lovers. Both of them are too much passionate, too much impatient, and moreover, too much “doting for loving” each other to accept the amicable and warmhearted advice by Friar Lawrence. Indeed Friar Lawrence gives his considerate advice to them:

“Wisely and slow. They stumble that run fast (II, iv, 193)” or
“These violent delights have violent ends,
And in their triumph die, like fire and powder,
Which, as they kiss, consume. (II, vi, 11. 9-11)”

I rather agree with Prof. P. Milward who says in his book to the effect that every human beings has his own will, by which he goes beyond the activities of the stars, or Fate, or Destiny, or Fortune etc. In the case of the star-crossed lovers, there were so many chances that they would change the activities of the stars, or Fate, or Destiny, or Fortune, etc. But, according to Prof. Milward, it is by Romeo, not by Fortune, that the disastrous end was caused: by his own will he impatiently decided that the revenge against Tybalt was his only means. Then what is “his own will”? Prof. Milward does not explain plainly. But if I try to explain the meaning of “his own will” by using Friar Lawrence’s words, I assure you that it is “grace will” and “rude will” (II, iii, 1. 28). Romeo’s will is, of course,

“rude will”.

Shakespeare adapted this tragedy to the mediaeval view of the Destiny on the surface, but the play itself shows us that he could not dissemble his susceptibility to the “humanity-centered” movement of Renaissance.

序

Shakespeare の Romeo と Juliet の悲劇は運命悲劇と一般に言われている。Cambridge 大学の *The New Shakespeare の Romeo and Juliet* を見ても、Introduction のところで、George Ian Duthie は

Romeo and Juliet are ‘star-crossed’. Again and again the dialogue brings out the theme of the malignant influence of the stars on human beings. From quite early in the play we have the expression of premonitions of unhappy doom. The lovers are the predestined victims of a malicious Fate. Fortune is against them. The stars, or Fate, or Destiny, or Fortune, or whatever other specific name may be applied to the cosmic force with which we are concerned, brings the lovers together, gives them supreme happiness and self-fulfillment for a short time, and then casts them down to destruction.⁽¹⁾

と解説をしている。又、ピーター・ミルワード教授も「シェイクスピア入門」の中で、

ロミオとジュリエットは、はじめから終わりまで「悲運の星に魅入られた」恋人たちとして描かれている。⁽²⁾

とのべている。だが Romeo と Juliet は the predestined victims of a malicious Fate であるという理由で、この芝居を運命悲劇と言い切るには問題が残ると思う。なぜなら二人は何も運命にあやつられていた、いわば、あやつり人形の如き者ではなかったからである。又 star-cross'd lovers であるという理由で、この芝居を運命悲劇とするには無理があるようにも思う。

Romeo と Juliet のこの芝居が、運命悲劇であるということについて、もっと適切な説明がないであろうか。富原芳彰教授は「ロミオとジュリエットの悲劇性」と題して、小津次郎教授還暦記念論文集（1980年刊）に論文を発表してい

る。⁽³⁾その中で富原教授は、

『ロミオとジュリエット』はシェイクスピアの悲劇のうちで、「運命悲劇」と呼ばれるにもっともふさわしいものであろう。しかし、いかなる悲劇にとっても、運命は不可欠の要素であり、運命がそれに本質的なかわりを持たない悲劇は存在しない。『ロミオとジュリエット』は、たしかに、シェイクスピアの悲劇の中では運命の果している役割が通常以上に大きく、結果的に見れば、それはシェイクスピアが彼の悲劇探究の道程において一度は通る必要のあった、ひとつの極端な場合を示しているとも言える。

とのべ、「Romeo と Juliet の悲劇」が運命悲劇である理由として、

悲劇とは人間の尊厳のために運命に抗議し、これと最後まで戦って倒れた人間の物語でなければならない。『ロミオとジュリエット』という劇が悲劇をなすのは、題名の二人が単純に不運 ('star-cross'd')であったからではない。かれらはかれらの力の限りをつくして運命に抵抗し、これと戦い、これを克服しようと努めたのである。それにもかかわらず、二人はやはり運命に勝つことはできず(それが悲劇の論理である)、結局再び'star-cross'd lovers'であらざるを得なかったところにこの悲劇の核心がある。

と言っている。そうして更にギリシャ悲劇や Shakespeare の四大悲劇に論拠をおいて論をすすめ、悲劇の主人公は、

精神的にも肉体的にも苦悩に耐え、結局は精神的とも肉体的とも区別のつかなくなる苦悩に耐えつづけ、普通の人間の耐え得る限度を超えて耐えつづけた果てについに大木が倒れるようにして倒れる「英雄」でなくてはならない。ロミオもジュリエットもそういう英雄になるためにはあらゆる意味で弱小であった。……悲劇の主人公は泣かないものである。ロミオとジュリエットはかれらの不運を泣いているところがある。かれらの物語は本来悲劇よりは悲話となるにふさわしいものだったとさえ思われる。

とのべ、そのような悲話にならないために、

泣いているロミオとジュリエット、自殺を急ごうとするロミオとジュリエットを叱咤し、かれらに運命とたたかうことを教え、そのことにおいてか

れらを助けるのは僧ロレンスであり、かれらは彼の後楯をえてはじめて運命と立ち向う人物になる。

と言っている。教授の言う運命とは、

神あるいは神々の意志、遍在する意志、宇宙のメカニズム、あるいは歴史的必然など、さまざまに呼び分けられているものを、ここではこの一語で代表させる。

と註で説明しているので、要するに、人間の意志ないし力ではどうすることも出来ないところの、人間以上のものということになるらしい。具体的には、運命とは、例えば、RomeoがTybaltを刺し殺した後、我に返って言うセリフ、即ち、

O, I am fortune's fool!

の fortune であり、又、例えば Juliet が死んだという知らせを Mantua で受け取った時、さげふ

Is it even so? then I defy you, stars!

の stars であるようである。従って富原教授は、Romeo も Juliet も単に運命にあやつられた恋人達の悲劇ということで運命悲劇というのではなくて、僧 Lawrence の後楯によって、運命に逆らい、運命と戦って結局破れたということで運命悲劇と見ているのである。しかし私は富原教授の説に賛成出来ない。それは、第一に、僧 Lawrence の助けや後楯によるにしても、Romeo と Juliet は、教授の言うように、「かれらの力の限りをつくして運命に抵抗し、これと戦い、これを克服しようと努めた」であつたらうかということである。本論で私は Plot に従って詳細に見て行くつもりであるが、私にはそのようには思えないのである。なる程、Shakespeare は中世の人々が考えていた如何とも仕方のない運命の持つ力、そして、それに対する人間の無力さという考え方を受け継いではいたけれど、やはり、Renaissance の人間性を強調する時代精神を感じ取っていたと言ったら良いのか、Romeo にも Juliet にも悲劇の責任の一端は負わせているよう

に私には思えるのである。そうして、Romeo や Juliet にも責任の一端を負わせている以上、彼らの人物をあらゆる性格が、不十分ながらも Shakespeare によってあらわされているのであって、菅泰男教授が「二人の性格は書きこんでなくて、ただ典型的な若い恋人たちである」と申される点に、私は不満なのである。すなわち、菅教授は、1964年シェイクスピア生誕四百年を記念して、日本シェイクスピア協会が出版した「シェイクスピア案内」⁽⁴⁾の中で、

『ロミオとジュリエット』はギリシヤ悲劇と同じ意味で運命悲劇と言うわけにはいかないが、二人の主人公は不幸な星のめぐりあわせのもとに生れた恋人たち (star-crossed lovers) でふしあわせな事件の連続が二人を死へ追いやる。二人の性格は書きこんでなくて、ただ典型的な若い恋人たちである。この悲劇は性格の悲劇ではなくて、境遇の悲劇である。そして作品の特色から言うと「抒情悲劇」と呼ぶのがもっともふさわしい。

と言っている。「作品の特色から言うと抒情悲劇と呼ぶのがもっともふさわしい」と言うのは、おそらく Granville-Barker の説に賛成しての発言であろうし、又「ギリシヤ悲劇と同じ意味で運命悲劇と言うわけにはいかない」という言葉も、前述の富原教授の説によってかなりよくわかるのであるが、「典型的な若い恋人たち」というのはどういう恋人たちなのかわからないのである。おそらく「どこにでもいる恋し合い、愛し合っている若い男女」ということなのだろうと思う。それにしても、「この悲劇は性格の悲劇ではなくて、境遇の悲劇である」は、おそらく、例えば、Middleton Murry が彼の *Shakespeare* の中で言っている言葉

It is only the tempest of circumstance which wreacks the life of Romeo and Juliet.
 ...They are the victims not of their passion but of crass casualty ; they are fortune's fools, not their own. (pp. 186-7)

と通ずるのであろうが、私は、本論で述べるように、Romeo にも Juliet にも衝動的で、無分別で、かつ性急な行為に走りやすい性格があつて、そういう性格が彼らの悲劇を招いたとさえ言えると思うのである。従つて、運命に逆らい、勇敢に立ちむかって、無惨に破れたということで運命悲劇というには、私を納

得させるのに不十分であるし、性格の悲劇ではないという説には、二人のあまりにも無分別で、性急すぎる行動や衝動的行為に走りやすい点をあげて、反論したいのである。

兎に角、Plot の展開に従って、Romeo と Juliet の二人の人物に焦点をあてながら、この物語を見て行くことにする。

1

一幕一場で Romeo は Rosaline への恋に悩む若者として登場する。Romeo が友人の Benvolio に話すところによると、

Why then, O brawling love, O loving fate,
 O anything, of nothing first created!
 O heavy lightness, serious vanity,
 Misshapen chaos of well-seeming forms,
 Feather of lead, bright smoke, cold fire, sick health,
 Still-waking sleep, that is not what it is!
 This love feel I, that feel no love in this. (I, i, 11. 178-184)

つまり、Romeo は彼の恋心が Rosaline に受け入れてもらえないがために悩んでいるのである。Romeo によると、Rosaline は、

She will not stay the siege of loving terms,
 Nor bide th' encounter of assailing eyes,
 Nor ope her lap to saint-seducing gold. (*Ibid.*, 11. 214-216)

そして、あまつさえ、

She hath forsworn to love,---(*Ibid.*, 1. 225)

であった。それで Romeo は、

...and in that vow
 Do I live dead that live to tell it now. (*Ibid.*, 11. 225-226)

という有様であった。全く生ける屍同然であるから、

Tut! I have lost myself; I am not here;
This is not Remeo, he's some other where. (*Ibid.*, 11. 199-200)

というように、自分自身をすっかりなくしてしまっている己れの姿を Romeo は告白しているのである。

若い時には、だれしも一度や二度

…She'll not be hit
With Cupid's arrow. (*Ibid.*, 11. 210-211)

とって嘆くことはあるものであるが、Romeo の父の Montague が心配のあまり、息子のことを Benvolio に語る言葉、即ち、

Many a morning hath he there been seen,
With tears augmenting the fresh morning's dew,
Adding to clouds more clouds with his deep sighs;
But all so soon as the all-cheering sun
Should in the farthest East begin to draw
The shady curtains from Aurora's bed,
Away from light steals home my heavy son
And private in his chamber pens himself,
Shuts up his windows, locks fair daylight out,
And makes himself an artificial night.
Black and portentous must this humor prove
Unless good counsel may the cause remove. (*Ibid.*, 11. 133-144)

からすると、Romeo の恋心は異状というより外はない。暗い夜を涙しながらさまよい歩き、昼間は部屋に閉じこもって太陽をしめ出し、自分の手で人工の夜を造り出しているということは、父親の言うごとく portentous である。Benvolio の言うように、

Blind is his love and best befits the dark. (II, i, 1. 32)

従って Romeo の心は暗闇なのである。心が暗闇であるから自分自身を見失なう (I have lost myself.) ことになり、又、恋は盲目であるが故に、

He that is stricken blind cannot forget
The precious treasure of his eyesight lost. (I, i, 11, 234-235)

ということになるのであろう。そこでどうしても理性という視力を回復し、その結果、暗闇の中から Romeo 自身を救い出すのには、Benvolio の言うように、

By giving liberty unto thine eyes. (*Ibid.*, 1. 229)

しなければならない。具体的には、

Examine other beauties. (*Ibid.*, 1. 230)

ということしかないのである。他の女の人達を見くらべている中に、容姿ばかりではなく、心も、考え方も、わかるようになるから、自然と正気を失わない、本来の Romeo 自身に立ちかえることが出来ると Benvolio は思うのであった。

2

どうやら Romeo の恋はひと目ぼれの類いのものであるようである。なぜならあれ程までに恋いこがれていた Rosaline に対する思も、Juliet をひと目見るや、

It seems she hangs upon the cheek of night
As a rich jewel in an Ethiop's ear--
Beauty too rich for use, for earth too dear!
So shows a snowy dove trooping with crows
As yonder lady o'er her fellows shows.
The measure done, I'll watch her place of stand
And, touching hers, make blessed my rude hand.
Did my heart love till now? Forswear it, sight!
For I ne'er saw true beauty till this night. (I, v, 11, 46-54)

と変わってしまうからだ。Romeo が Benvolio に

Show me a mistress that is passing fair:
What doth her beauty serve but as a note

Where I may read who passed that passing fair? (I, i, 11. 236-238)

と言った時の、あの Romeo はどこへ行ってしまったのかとおどろく程である。事実、我々読者（又は観客）にとっても、Rosaline に対する恋心が、彼女に受け入れてもらえなくて、歎き悲しんでいた Romeo が、今度は Juliet をひと目見たとたん、手のひらをかえすように、新しい恋の炎を Juliet に対してもやすということが、現実にも果してあり得ることなのだろうかと思わしく思えて、何か不自然な気がするのだが、話がそういうことになっているので、僧 Lawrence が言うように、

Holy Saint Francis, what a change in here!
Is Rosaline, whom thou didst love so dear,
So soon forsaken? young men's love then lies
Not truly in their hearts, but in their eyes. (II, iii, 11. 65-68)

と、吾々も思わなければならない。ところが Benvolio はそういう Romeo の恋心というものを、すでに見抜いていたので、この芝居の 1 幕 2 場ではっきりと、

Take thou some new infection to thy eye,
And the rank poison of the old will die. (I, ii, 11. 50-51)

と言っているのである。否、Benvolio ばかりではない。Romeo が帰依している僧 Lawrence も、Romeo の恋をすでに *doting* (II, iii, 1. 82) と思っていたのであった。だから僧 Lawrence は、そんな恋は埋めてしまえ (II, iii, 1. 83) とさえ、Romeo に言っていたということである。それで僧 Lawrence も Benvolio とは別な言い方で、一目ぼれの恋にのめりこんで行く (*doting*) Romeo を何とか本来の Romeo 自身に立ちかえらせようと心をくわいていたのであった。

ところで Rosaline はどうして Romeo の恋を受け入れなかったのであろうか。Rosaline は *Dramatis Personae* として登場していないので、直接彼女の口から聞くことは出来ないが、僧 Lawrence の言うところによれば、

...O, she knew well
Thy love did read by rote, that could not spell. (II, iii, 11. 87-88)

ということであるらしい。Romeoの恋は「空で読んでいるようなもので、文字には綴れない」ものだとは、真実心のないうわづったものだという事であろう。別な言葉で言えば、Romeoの恋心とはひと目ぼれ the charm of looks (Act II, chorus, l. 6), 別な美しい女性があらわれるとそちらにのり移ってしまうような、真実味のない一時的なものだということを Rosaline はすでに見抜いて承知していたのであろう。

3

2幕1場で Mercutio が,

If love be blind, love cannot hit the mark. (II, i, l. 33)

と言っているが、Romeoの恋を言いあてているようで面白い。すなわち、盲目の恋は、暗闇の中で物事がはっきり識別出来ないのと同じく、互に相手を理解し合うこともないから、所詮成就しないものだという事である。ところが Romeo は、

Alas that love, whose view is muffled still,
Should without eyes see pathways to his will. (I. i. 11. 173-174)

と言っている。すなわち、盲目の恋は己れの意志 (his will) のおもむくままに、突っ走ることを告白しているのである。his will とは何であろうか。人間には神的なものと獣的なものがあると常々争っているということを西洋の賢人は教えているが、僧 Lawrence も、同じように

Within the infant rind of this weak flower
Poison hath residence, and medicine power;
For this being smelt with that part cheers each part;
Being tasted, stays all senses with the heart.
Two such opposed kings encamp them still
In man as well as herbs--grace and rude will;

And where the worser is predominant,
Full soon the canker death eats up that plant. (II, iii, 11. 23-30)

と言っておるので、Romeo のいう his will とは、神的なものに対する獣的なもの、僧 Lawrence の言葉で言えば、rude will のことであって、具体的には、はげしい性欲を指すことになるであろう。従って Romeo の恋は彼の性欲が求める恋であるとも言えるのであって、Mercutio は、はっきり、

Now will he sit under a medlar tree
And wish his mistress were that kind of fruit
As maids call medlars when they laugh alone. (II, i, 11. 34-36)

と言いつけているのである。そういう恋は Mercutio の言うように成就するはずがない。

以上のように、Benvolio、僧 Lawrence そして Mercutio の言葉から、Romeo の恋を色々考えてきたのであるが、結局のところ、Romeo の恋は性欲の対象として、或は性欲の満足のために求める恋の類であるということを知るのである。そういう恋であるから、Rosaline は受け入れなかったのである。しかし Romeo は Capulet が言うように、

Verona brags of him
To be a virtuous and well-governed youth. (I, v, 11. 68-69)

であるから、当然、性欲からくる罪の意識も強くあったはずであり、又あるからこそ、暗闇の夜が彼にはふさわしいのでもある。

性欲からくる罪の意識は Juliet とはじめて交わす言葉にも出ている。

Romeo. . . Thus from my lips, by thine my sin is purged.
(Kisses her.)

Juliet. Then have my lips the sin that they have took.

Romeo. Sin from my lips? O trespass sweetly urged!
Give my my sin again. (Kisses her.) (I, v, 11. 108-111)

かくして Romeo は Juliet と唇を重ねることが出来たのであるが、唇を重ねるということは肉体的接触を求める性欲の、一つのあらわれである。a virtuous and

well-governed youth である Romeo は、手をふれるだけでも holy-shrine である Juliet の手を汚す (profane) ことになる (I, v, ll. 95-96) とさえ思う程、罪の意識をもっていたのに、Juliet と唇を重ねた結果、本当に罪の意識はぬぐいとられる (purged) ことになってしまっ、以後 Romeo は性欲の虜になってしまい、rude will の命ずるままになって行くのである。

4

一方 Juliet の方はどうであろうか。彼女はやがて14歳になろうとしている娘で、父親の Capulet によると、

My child is yet a stranger in the world. (I, ii, 1. 8)

ということなので、いわば世間知らずの、うぶな娘である。Paris からの求婚のことで、Lady Capulet が、

Speak briefly, can you like of Paris'love? (I, iii, 1. 96)

ときかれた時、Juldet ははっきりと、

I'll look to like, if looking like move;
But no more deep will I endart mine eye.... (Ibid., 11. 97-98)

と答えるだけの分別を持っている。若い年頃の恋というものは、僧 Lawrence も言うように、

Young men's love then lies
Not truly in their hearts, but in their eyes. (II, iii, 11. 67-68)

だれでも、ひと目ぼれから始まる。だが僧 Lawrence が Romeo をさとして

Wisely and slow. They stumble that run fast. (Ibid., 1. 94)

と言っているように、分別を持って、ゆっくりと事をすすめてゆく心がなけれ

ばならない。ところが Juliet も Ball の時、Romeo とはじめて逢って、たちまち Romeo にひと目ぼれしてしまった。そのため有名な二幕二場では、Juliet はバルコニーに出て、

O Romeo, Romeo! Wherefore art thou Romeo? (II, iii, 1. 33)

と物思いにふけるのである。そこでは恋の手引によって、Capulet 家の高い塀をのりこえて庭にしのみこんでいた Romeo が聞いていたのであったが、盗み聞きされたと知って Juliet は恋の喜びに頬を赤くするのである。でも彼女は、

But trust me, gentleman, I'll prove more true
Than those that have more cunning to be strange.
I should have been more strange, I must confess,
But that thou overheard'st, ere I was ware,
My true love passion. (*Ibid.*, 11. 100-104)

と言って、決して浮わついた心 (*Ibid.*, 1. 105) でいるのではないと言う。しかも Juliet には、Romeo とは違って、分別をもって愛の心を育ててゆこうとする心がこの時にはあるようで、

Although I joy in thee,
I have no joy of this contract tonight.
It is too rash, too unadvised, too sudden;
Too like the lightning, which doth cease to be
Ere one can say it lightens. Sweet, good night!
This bud of love, by summer's ripening breath,
May prove a beauteous flow'r when next we meet. (*Ibid.*, 11. 115-122)

と言っている。そういう心は、恋にめざめた女性なら皆いなく、女性の本能的な心かも知れないが、この場では Romeo とは全く対象的であると言えよう。即ち、性欲の衝動に駆られている Romeo が、

What shall I swear by? (*Ibid.*, 1. 112)

と言うのに対し、Juliet は、

Do not swear at all;
 Or if thou wilt, swear by thy gracious self,
 Which is the god of my idolatry,
 And I'll believe thee. (*Ibid.*, 11. 112-115)

と冷静さを失わない。ところが Romeo の方は rude will によって肉体的接触を求めているから、性欲そのものである。

Romeo. O, wilt thou leave me so unsatisfied?
Juliet. What satisfaction canst thou have tonight?

そうして、そういう Romeo に対して、なだめるように、はっきりと、

If that thy bent of love be honorable,
 Thy purpose marriage, send me word tomorrow,
 By one that I'll procure to come to thee,
 Where and what time thou wilt perform the rite;
 And all my fortunes at thy foot I'll lay
 And follow thee my lord throughout the world. (*Ibid.*, 11. 143-148)

と言うのである。これは、rude will になっている時の Romeo ではなく、grace will である Romeo、即ち Capulet の言葉で言えば、“virtuous and well-governed youth”である Romeo を信じての Juliet の乙女心であると言うべきであろう。

ところが、性欲の虜になり、そのために物狂おしくなっている Romeo は、性欲の満足を得るために結婚を考えているだけであって、Romeo の足許に一切を投げ出して、世界のどこにでもついて行くという Juliet の願を考慮だけの心がなかった。僧 Lawrence をせかして Juliet との結婚式をあげるのも、性欲の虜になっていたがためである。結婚式をあげてからの二人は、どうしたらよいかという計画がない。ただ二人を包む夜のおとずれを心待ちに待つだけである。ここにも、二人の悲劇の原因があると考えてもよからう。

5

Romeo の以上のような姿は、性欲の虜になってしまっている姿であるがために Mercutio は、

Alas, poor Romeo, he is already dead :
stabbed with a white wench's black eye ; run through
the ear with a love song ; the very pin of his heart
cleft with the blind bow-boy's butt-shaft ;……(II. iv, 11. 14-17)

といている。つまり精神的な意味において Romeo はも早死んでしまっている——分別のある人間ではなくなっている——と見抜いているのである。そして、又、Mercutio は、

Without his roe, like a dried herring. (*Ibid.*, 1. 40)

といい、いつもの卑猥な言葉で、

For this driveling love is like a great
natural that runs lolling up and down to hide his
bauble in a hole. (*Ibid.*, 11. 97-99)

といて、Romeo は性欲の炎に狂っていることをのべている。

一方、Nurseはどうかという Juliet の使として、Romeo に逢って帰るのであるが、吉報を待ちこがれている Juliet に中々話をしたがらない。それどころか、しびれをきらして、

Let me be satisfied, is't good or bad? (II, v, 1. 37)

とせかす Juliet に、

Well, you have made a simple choice ; you
know not how to choose a man. Romeo? No, not
he. Though his face be better than any man's, yet
his leg excels all men's ; and for a hand and a foot,
and a body, though they be not to be talked on,

yet they are past compare. He is not the flower of
 courtesy, but, I'll warrant him, as gentle as a lamb
 Go thy ways, wench; serve Good. (*Ibid.*, 11. 38-45)

といっているが、この言葉は Juliet をじらして面白がる中年女性の一寸した悪ふざけと受け取るべきであろうか。私にはそうは思えないのである。Nurse は卑猥な話を好む女性であるから、Romeo をはじめて見た時、Benvolio や Mercutio と同じように、性欲の虜になり、狂っている Romeo を本能的に、しかも直感的に感じ取ったのではなかったか。つまり、a fool's paradise (II,IV,1. 174) へ連れこもうとしている Romeo だということを本能的に読み取ったと思うのだ。だから、中々話したがらず、「つまらぬ撰択をした (You have made a simple choice.)」とか、「男を見る目がない (You knows not how to choose a man.)」と Juliet に言う言葉は、案外 Nurse の本心であったと思うのである。しかし Nurse にとって Juliet は14歳になるかならぬかの年であっても、自分自身の主人であることは間違いないことであるので、これ以上忠告めいた言葉は言わず、ただ Go thy ways というより外はなかったのである。そして一切のことは神様がよく御存知、だから“Serve God”という言葉もつけ加えたのであろう。

こういう Nurse の態度は、Juliet の使いとして Romeo のところに行った時、Romeo に対する言葉にも感ぜられる。すなわち、はじめて逢った Romeo になぜ Paris が Juliet に求婚しているという話をしなければならなかったのかということが疑問になるのだが、やはり性欲の虜になっている Romeo を見抜いたからではなかったか。Nurse の Romeo に言った言葉をみってみると、

Well, sir, my mistress is the sweetest lady. Lord,
 Lord! When 'twas a little prating thing--O, there is
 a nobleman in town, one Paris, that would fain lay
 knife aboard; but she, good soul, had as lief see
 a toad, a very toad, as see him. I anger her sometimes,
 and tell her that Paris is the properer man;
 but I'll warrant you, when I say so, she looks as
 pale as any clout in the versal world. (II, iv, 11. 207-214)

となっている。ここで注目されるのは Juliet が *sweetest lady* であるというのは自分の主人であるから当然としても、Juliet に求婚している Paris が *the properer man* だとはっきり比較級を使って言っていることである。Romeo が Capulet の言うように、*a virtuous and well-governed youth* (I, v, l. 69) であるなら、卑猥な話の好きな Nurse といえども、このような言葉、すなわち *Paris is the properer man* といって Juliet を怒らしているとは言わなかったと思うのである。

それから、もうひとつ、Nurse のこの言葉の中で注目されるのは、彼女が Paris の話をすると、Juliet は Paris の顔を見るよりヒキガエルの顔を見る方がましだと言い、あまり言うとは Juliet の顔色がかわると言っていることである。つまり、この Nurse の言葉から、今や Juliet も恋の激流に流される程までになってしまったことがわかるのである。だから僧 Lawrence でさえも、Romeo の手はず通り僧 Lawrence の庵室へ一人でやって来た Juliet をひと目見て、次のように言っている。

Here comes the lady. O, so light a foot
Will ne'er wear out the everlasting flint.
A lover may bestride the gossamers
That idles in the wanton summer air,
And yet not fall; so light is vanity. (II, vi, 11. 16-20)

Juliet の軽やかな足どりは、彼女の心の状態をあらわしているのであろう。Juliet の告白によれば、

But my true love is grown to such excess
I cannot sum up sum of half my wealth. (*Ibid.*, 11. 33-34)

と彼女の恋心は大きくなる一方であるというのである。もうすでに Juliet の分別はなくなってしまうと、Romeo と同じように、恋の情欲の中にのめり込んでいることは確かになってしまっている。だから僧 Lawrence によって Romeo との秘密の結婚式を終えてしまうと、Juliet は黒いマントの夜をひとしお待ちこがれ、Romeo と同じように、

...if love be blind,
It best agrees with night. (III, ii, 11. 9-10)

と言う有様である。彼女にとって、夜は、

love-performing night. (*Ibid.*, 1. 5)

だからである。恋を成就するためには、野生の鷹に目かくしして飼いなすように、分別を捨てて大胆にならなければならない。大胆に振舞うことによって、いつのまにか、誠の恋と思うようになるためにも、黒いマントの夜が Juliet に必要だったのである。兎に角、

So tedious is this day
As is the night before some festival
To an impatient child that hath new robes
And may not wear them. (III, ii, 11. 28-31)

というような Juliet であるから、彼女も恋の暗闇の中に落ち込んでしまって、Romeo と同様、自己自身を見失なってしまっているのである。

6

このように Romeo も Juliet も、今や完全に恋の虜になってしまったため、秘密の結婚式をすませてからの二人の生き方について、とことん話し合うということが見られない。二人はただ求め合い恋し合うだけであるから、はげしい恋の情欲に流されて行く行き先は、僧 Lawrence も言うように、

These violent delights have violent ends
And in their triumph die, like fire and powder,
Which, as they kiss, consume. (II, vi, 11. 9-11)

なのである。そうして、事実、彼らのはげしい喜びが、はげしい破滅となり、勝利の喜びの中に死の影が入り込む時が、秘密の結婚式後、Romeo の場合は—

時間あと、Juliet の場合は三時間 (thy three-hours wife III, ii, 1. 99) たつてくるのであった。それは Romeo による Tybalt 殺害という出来ごとと、Romeo の追放という処分である。

もともと Romeo が Tybalt を殺害するに至った理由は、Romeo の友人である Mercutio が Tybalt によって殺されたためであった。Verona の街で殺害事件を起した者は死刑に処せられることを Romeo は十分承知していたはずである。それ故、Juliet との恋に生きるためには Tybalt による Mercutio 殺害の件を Prince of Verona にまかせるだけの、冷静な分別が Romeo にあってしかるべきであった。そういう冷静さがなく、

Away to heaven respective lenity,
And fire-eyed fury be my conduct now! (III, i, 11. 127-128)

と言って、Mercutio のかたきとばかり剣を抜いて Tybalt にむかって行った Romeo なのであるから、Romeo 自身が自分の悲劇的結末を、自分で選んだと言っても良いであろう。

どうやら Romeo には激情に流されやすく、そのため自分を見失ってしまう性格的欠点があるようだ。Rosaline や Juliet への恋に悩む姿もそうであるし、Tybalt 殺害の時の Romeo もそうであった。又 Tybalt 殺害後、僧 Lawrence の庵室に身をかくしている Romeo に、追放処分の宣告があったことを僧 Lawrence が伝えた時も、やはりそうであった。即ち、

There is no world without Verona walls,
But purgatory, torture, hell itself.
Hence banished is banished from the world,
And world's exile is death. Then "banished"
Is death mistermed. Calling death "banished,"
Thou cut'st my head off with a golden ax
And smilest upon the stroke that murders me. (III, iii, 11. 17-23)

といって泣きわめく Romeo であった。僧 Lawrence は、

O deadly sin! O rude unthankfulness! (*Ibid.*, 1. 24)

としかりつけ、又、色々さとしても聞かず泣きわめく Romeo に、

Thou fond mad man, hear me a little speak. (*Ibid.*, 1. 52)

といい、それでもなお、短剣でひと思いに自分を突いて死のうとする Romeo に、

Art thou a man? Thy form cries out thou art;
Thy tears are womanish, thy wild acts denote
The unreasonable fury of a beast. (*Ibid.*, 11. 108-110)

とまで言っている。吾々が Romeo について今まで見てきた通りのことが、僧 Lawrence によって、はっきり要約されて述べられたという感がする。

一方、Tybalt が Romeo によって殺されたという予期せぬ悲報に接した Juliet は、どういう態度をとったであろうか。Juliet も又、前述のように、一切の分別を盲目にする夜を呼びよせて、愛の虜になることを激しく願っていたのであるが、Romeo が Tybalt を殺したということを知らされて、

O serpent heart, hid with a flow'ring face! (III, ii, 1. 73)

といて驚き、次のように言う。

Did ever dragon keep so fair a cave?
Beautiful tyrant! Fiend angelical!
Dove-feathered raven! Wolvish-ravens lamb!
Despised substance of divinest show!
Just opposite to what thou justly seem'st--
A damned saint, an honorable villain!
O nature, what hadst thou to do in hell
When thou didst bower the spirit of a fiend
In mortal paradise of such sweet flesh?
Was ever book containing such vile matter
So fairly bound? O, that deceit should dwell
In such a gorgeous palace! (*Ibid.*, 11. 74-85)

Juliet のこの言葉は、Romeo に対する愛と憎しみとはげしくゆれ動く Juliet の心を簡潔に表現していると言えよう。だが、それをつかの間、やがて Romeo に対する愛の心が勝利を得て、

My husband lives, that Tybalt would have slain;
 And Tybalt's dead, that would have slain my husband.
 All this is comfort; wherefore weep I then? (*Ibid.*, 11. 105-107)

といい、何のためにそれでは泣くのかと考えた時に、「追放」という言葉が Tybalt の死よりもずっと悲しいと言い、その上、

Or, if sour woe delights in fellowship
 And needly will be ranked with other griefs,
 Why followed not, when she said "Tybalt's dead,"
 Thy father, or thy mother, nay, or both, ……(*Ibid.*, 11. 116-119)

と、彼女の父や母がたとえ死んだとしても、Romeo の追放の方が、それにもまして、ずっと悲しいことだと考えるようになる。こうして、Juliet は、

I'll to my wedding bed;
 And death, not Romeo, take my maidenhead! (*Ibid.*, 11. 146-147)

と、はやくも死を覚悟するのである。

このように、互にはげしく求め合う恋が成就しなければ死ぬばかりだというような Romeo と Juliet の考えは、二人共、盲目の恋をしているからである。特に Romeo の場合は、バルコニー・シーンのところで Juliet が、

And all my fortunes at thy foot I'll lay
 And follow thee my lord throughout the world. (II, ii, 11. 147-148)

とまで言ったのだから、そういう Juliet を引っぱって行かねばならぬ立場にあるのである。だから Juliet が盲目の恋をしていても、Romeo は盲目の恋からはつきり目覚めて、未来のことまで見通す分別が必要なはずである。分別があれば僧 Lawrence が、

Thy Juliet is alive,
 For whose dear sake thou wast but lately dead.
 There art thou happy. Tybalt would kill thee,
 But thou slewest Tybalt. There art thou happy.
 The law, that threat'ned death, becomes thy friend

And turns it to exile. There art thou happy.
 A pack of blessings light upon thy back ;
 Happiness courts thee in her best array,…… (III, iii, 11. 134-141)

と言っているように、Romeo には全く幸運であることがわかるはずなのである。
 従って、

O, I am fortune's fool! (III, i, 1. 140)

と歎く必要は少しもないはずである。事態を冷静に考えてみれば、僧 Lawrence
 が言うように、

A pack of blessings light upon thy back,…… (III, iii, 1. 140)

なのである。ところが「理性を失なった獣同然の興奮 (the unreasonable fury
 of a beast) (III, iii, 1. 110)」状態にある Romeo には幸運には思えないのであ
 る。そういう Romeo に対して僧 Lawrence は、それ故、

Take heed, take heed, for such die miserable. (*Ibid.*, 1. 144)

と忠告するのである。

しかし僧 Lawrence の予想通り、盲目の恋の Romeo も Juliet も、such die
 miserable へと一直線にむかって行くのである。

7

後朝の別れの後でも、Romeo と Juliet が僧 Lawrence の骨折を信頼し、近い
 将来二人は晴れていっしょになれるということを楽しみに、一時の別離の悲し
 みに耐えることが出来れば、この物語は別な展開や発展を遂げたであろう。と
 ころが、Juliet は Romeo との別離を悲しみ歎くものだから、Romeo との関係
 を全く知らない Juliet の両親は、てっきり Tybalt の死を悲しんでいるものと思
 えて、娘の悲しみを和らげるためにも、Paris との結婚を現実させようと取り

計らう。Juliet は必死の思いで Paris との縁談をことわろうとするが、父親の逆鱗に触れ、

And you be mine, I'll give you to my friend ;
 And you be not, hang, beg, starve, die in the streets,
 For, by my soul, I'll ne'er acknowledge thee,
 Nor what is mine shall never do thee good.
 Trust to't. Bethink you. I'll not be forsworn. (III, v, 11. 192-196)

と申し渡される。母親にも取りなしを求めて、

Delay this marriage for a month, a week ;
 Or if you do not, make the bridal bed
 In that dim monument where Tybalt lies. (*Ibid.*, 11. 200-202)

と言うのであるが、

Talk not to me, for I'll not speak a word.
 Do as thou wilt, for I have done with thee. (*Ibid.*, 11. 203-204)

と相手にされない。そこで nurse に助けを求めるが、Romeo をあきらめて、Paris と結婚するやうにと次のように言う。

Romeo's a dishclout to him. An eagle, madam,
 Hath not so green, so quick, so fair an eye
 As Paris hath. Beshrew my very heart,
 I think you are happy in this second match,
 For it excels your first ; (*Ibid.*, 11. 220-224)

これは nurse の本心であろう。Juliet が、

Speak'st thou from thy heart? (*Ibid.*, 1. 227)

と尋ねたのに対し、

And from my soul too ; else beshrew them both. (*Ibid.*, 1. 228)

と答えていることからわかる。なぜなら、前述の如く、nurse は卑猥な話が好

きな女だけあって、男を見る目があり、Romeo を一目みただけで Romeo の愛を性的なものに見抜いていたからである。

ところで、父の Capulet から「首をくくるなり、乞食をするなり、飢えるなり、往来で死ぬなり勝手にしろ。お前を私の子だとはみとめまい」と言われた時、そして母親からも「お前の勝手にするがいい (Do as thou wilt.)」と言われた時、「なぜ Juliet は Romeo の後を追って Mantua へ行こうとしなかったのだろうか。Juliet が本当に Romeo との恋に生きる覚悟があるのなら、そういう決心をしてもいいではないか」という不満が私にはあるのであるが、そういう考えはあまりにも現代的すぎるであろうか。確かに、当時の風潮として、父親にいわば生殺与奪の権があったし、又 Shakespeare の他の作品を見ても、父親に反抗する娘は (*The Merchant of Venice* の Shylock の娘 Jessica を除いて)、皆不幸に終わっている。死ななければならぬのである。だから Juliet も父親の意向に従えないということで、ひそかに死を考えるのは当然の事なのである。この結婚を一ヶ月の間、一週間でもいい、のばして下さい。もしもそれができないのなら、「make the bridal bed in that dim monument where Tybalt lies.」という Juliet の言葉がそれである。しかし母親の Lady Capulet は、怒り心頭に達している夫の Capulet に、

You are too hot. (III, v, 1. 175)

と言いながらも、自分自身も too hot になっていたし、又自分自身も、

I would the fool were married to her grave. (*Ibid.*, 1. 140)

という言葉を口にしていたので、Juliet の本心を読めなかったようである。かくして Juliet は死を決意しながらも、Romeo のためにも何とか生きる道はないものだろうか、僧 Lawrence を訪ねるのであるが、僧 Lawrence と二人きりになると、張り詰めた心もゆるみ、

Come weep with me-- past hope, past care, past help! (IV, i, 1. 45)

と言わざるを得なかったのであった。そこで僧 Lawrence は、死を覚悟している Juliet に42時間仮死状態になるという薬を与え、家に帰って両親に Paris との結婚を承諾したように言うこと、眠る前にこの薬を飲むと仮死状態になって、翌日の結婚式が葬式になること、この Verona の習慣として Capulet 家の墓所へ柩車で送られてくるからその間に Romeo に連絡して、こちらに来るように知らせておくこと、Juliet が目を覚ましたら Mantua へ一しよに出発させてやること等々話して、Juliet を帰らすのであるが、ここでも私は僧 Lawrence のやり方に不満なのである。即ち、何故にこんな手のこんだことをしなければ、Juliet を Romeo のいる Mantua へ逃してやれないのかということである。Juliet が *past hope, past care, past help!* と言って助けを求めて来た時、すぐさま、Juliet を変相させるとか何とかして、Romeo のいる Mantua へ逃がしてそれから後のことを考えるべきであったと思うのだが、これも又、現代的すぎるのであろうか。

一方 Mantua に追放されてきている Romeo は、Mantua に来た翌日 Balthasar から Juliet の死をきかされて、

Then I defy you, stars!

Thou knowest my lodging. Get me ink and paper
And hire post horses. I will hence tonight. (V, i, 11. 24-26)

というのであるが、このところの

Then I defy you, stars!

の stars は何であろうか。最初の序文のところ引用した George Ian Duthie の Introduction 中にある言葉、即ち、

the malignant influence of the stars on human beings

のことであろうか。私はそうは思わない。私は Happiness つまり、幸運の女神にとりたい。つまり、Romeo が Mantua に追放という処分をきかされた時、僧 Lawrence から「幸運の女神がお前に味方しているではないか、お前をしたっている Juliet が生きているということは幸運なことである。お前が Tybalt を殺さ

なければ逆に Tybalt によって殺されたかも知れないのに、お前が Tybalt を殺してお前が生きているということも仕合せ。又当然死刑であるのにお慈悲によって追放ということになったのも仕合せというべきである。Happiness courts thee in her best array. (III, iii, 1. 141)」ときとされて、Romeo はおそらく納得して Mantua に来たはずである。ところが Juliet が死んだと聞いたとたん、僧 Lawrence の説諭も吹きとんでしまって、「何が幸運だ、何が仕合せだ、そんなものくそくらえ！」といった気持が Then, I defy you, stars! の言葉であろうと思う。(僧 Lawrence の数えあげた仕合せを stars と複数にしたのであろう。) だから Balthasar は心配して、

I do beseech you, sir, have patience.
Your looks are pale and wild and do import.
Some misadventure. (V, i, 11. 27-29)

と言わざるを得なかったのである。Balthasar の言うように patience を持って、僧 Lawrence からの連絡を待つべきであった。それなのに Romeo は、

Well, Juliet, I will lie with thee tonight. (*Ibid.*, 1. 34)

といって、死ぬことを考え、その手段を思考する。そうして僧 Lawrence からの連絡も待たずに、

O mischief, thou art swift
To enter in the thoughts of desperate men! (*Ibid.*, 11. 35-36)

といって、自分自身を a desperate man に仕立ててしまった Romeo は毒薬を買い求める。

Let me have
A dram of poison, such soon-speeding gear
As will disperse itself through all the veins
That the life-weary taker may fall dead,
And that the trunk may be discharged of breath
As violently as hasty powder fired
Doth hurry from the fatal cannon's womb. (*Ibid.*, 11. 59-65)

ここで the life-weary taker と自分のことを言っているが、Juliet との恋が成就出来ないから life-weary だと言うのであれば、patience の心を持たざる男と言う外はなく、当然のこととして hasty powder に火をつけて violent end にむかって突進せざるを得ないのである。

僧 Lawrence からの連絡のことであるが、5 幕 2 場では僧 Lawrence の使いの僧 John が Romeo のところに使わされているのであるけれど、途中で疫病事件に巻きこまれたため、目的を果さず帰ってくるという happening が起る。このことは Romeo にとっても、又 Juliet にとっても不運な、予期せざることであったと考えられるのであるが、僧 Lawrence が、

But I will write again to Mantua,
And keep her at my cell till Romeo come-- (V, ii, 11. 27-28)

と言っていることではあるし、やはり Romeo に僧 Lawrence からの連絡を待つだけの patience の心があったら、Romeo と Juliet の悲劇は防げたかも知れない。

兎に角、patience の心がなく、hasty powder に火がついた如く死にむかって突進する Romeo であるから、心も savage-wild (V, iii, l. 37) になり、empty tigers も roaring sea も及ばぬ程、兇暴になってしまい、Juliet の墓に花を供えに来た Paris を殺してしまう。そうして Juliet のかたわらで Romeo は毒薬を飲んで死ぬのである。僧 Lawrence は、一瞬おくれて、かけつけてきたが、Romeo も Paris も死んでいるのを見て、計画がすべて破れたことを知る。僧 Lawrence は、

A greater power than we can contradict
Hath thwarted our intents. (V, III, 11. 153-154)

と言っているが、この場合の power を必ずしも運命の力とする必要はないと私は思うのだが、こういう考え方も現代的であろうか。Shakespeare でさえ、王子 Hamlet に

There are more things in heaven and earth, Horatio,
Than are dreamt of in your philosophy. (*Hamlet*, I, v, 11. 166-167)

と言わせているのである。何事も本人の計算通りにはならないのが世の中の常である。たとえ僧 Lawrence が Prince of Verona の言う如く a holy man (V, III, 1. 269) であったとしても、世の中のことは、彼の思い通りには必ずしもならないのである。

僧 Lawrence は目を覚ました Juliet を連れ出そうとするが、夜警の人の気配にあわてて、そこからとび出してしまふ。Juliet はいとしい Romeo が自分のかたわらで冷たくなっているのを見て、Romeo の短剣を胸に当てて、Romeo の後を追うのであった。

なぜ Romeo も Juliet も死なけねばならなかったのか。これはだれしもこの劇を見た人（或は読んだ人）は考える問題である。吾々は、以上の如く詳細にみてきたので、整理して言えば、Romeo も Juliet もひと目ぼれの恋に陥って思慮分別をなくし、ひたすら情欲のおもむくままに突っ走ったということに、悲劇の原因の一つがある。二つには Romeo も Juliet も結果的にはこの世で結ばれなかったから star-cross'd lovers ではあるが、運命の力の前には人間の力というものはいかに如何にか弱きものであるかということを経験の中世の思考形態を受けつぎながらも、

Thou desperate pilot, now at once run on
The dashing recks thy seasick weary bark! (V, III, 11. 117-118)

と Romeo に言わせているように、自分で求めた必然的な破滅であり、自分自身に悲劇の責任があると Shakespeare は考えたように思えるのである。従って、Romeo も Juliet も運命にあやつられたあやつり人形の如き、性格のない人物ではなく、思慮分別をもって行動することの出来ない、情緒不安定な、patience のない、そういう性格の若者であったと言えるであろう。逆に言って、二人に思慮分別があり、patience をもって行動したら、両家の永年にわたる family-feud は、僧 Lawrence のアドバイスの許で、解決したであろう。

Shakespeare がこの悲劇において言わんとしたことは、僧 Lawrence の言葉、即ち、

In man as well as herbs--grace and rude will;
 And where the worser is predominant,
 Full soon the canker death eats up that plant. (II, iii, 11. 28-30)

に要約されるであろう。

結 び

P・ミルワード教授は「シェイクスピア研究入門」の中で次のように言っている。

だがシェイクスピアは人間の根本的な自由の余地まで否定してはいない。人間は自由意志をはたらかせて、運命を超える力をもっているのだ。喜劇になるか悲劇に終るか、不幸になるか幸福に終わるかを決めるのは、まさにこの自由意志のはたらきなのである。これは復讐か和解かを決断するという形をとってあらわれる。「ロミオとジュリエット」が悲劇に終わるのはロミオが復讐の道をとるからにほかならない。親友マーキュシオをジュリエットのいとこのテイポルトに殺されたと知ったときロミオはこう叫ぶ。

慈悲の心なぞどうともなれ。これからは焔の目をした怒り

こそ俺の道しるべだ⁽⁵⁾

私は P・ミルワード教授の「人間は自由意志を働かして、運命を超える力をもっている」という言葉に大いに共感を覚えるものである。人間は運命を超えようとしても結局は超えることが出来ないのだと考えれば、これは中世の人々の考え方にもとづく運命論になり、Romeo と Juliet の場合も、運命に最後まで支配された不幸な恋人たちになってしまうであろう。ところが P・ミルワード教授のように「人間は自由意志を働かして、運命を超える力をもっている」と考えるならば、Romeo と Juliet の物語は近代的となる。西洋には特定の星の運行が人の運命を支配するという考えがある。Romeo も一幕四場で Capulet 家の Ball にのりこむ時、Benvolio のおそくなったぞというのに対し、

I fear, too early; for my mind misgives

Some consequence, yet hanging in the stars,
 Shall bitterly begin his fearful date
 With this night's revels, and expire the term
 Of a despised life closed in my breast,
 By some vile forfeit of untimely death.
 But he that hath the steerage of my course
 Direct my sail. On lusty gentlemen. (I, iv, 11. 106-113)

と言っている。Capulet家のBallにのりこんで行こうとするRomeoにとっては、いわば、敵地にのりこんで行くことと同じであるから、胸の鼓動がドキドキと打つのが聞こえるほどであったろうということが、Romeoのこの言葉から察せられるのであるが、それでもなお、自分の運命を超えて行こうとするRomeoの意志を知ることが出来る。

Romeoには運命の星の働きをかえるチャンスが幾度かあった。P・ミルワード教授のいわれるように、MercutioがTybaltに殺された時、Romeoに復讐の道をえらばずにこの件の処置をPrince of VeronaであるEscalusにまかせるだけの冷静な分別があったら、悲劇的結末への道に入りこまずにすんだであろう。又Mantuaへ追放されたRomeoがMantuaに来た翌日Julietの死をきかされた時も僧Lawrenceからの連絡を待つだけのpatienceがあれば、悲劇への道を直進せずすんだであろう。こういった点を色々取り出して見てみると、要するにRomeoは、己れの自由意志をあまりにも性急に、無分別に、かつ衝動的に働かせすぎているのである。

ところでP・ミルワード教授の「人間は自由意志を働かせて、運命を超える力をもっている」という時の、その自由意志とは何であろうか。教授は別に説明はしていないが、僧Lawrenceの言葉で、私が説明するとすれば、おそらく二幕三場二十八行目のgrace willのことになるであろう。RomeoもJulietもgrace willでもって行動すべきであった。Capulet家のBallにのりこむ時Romeoは、

But he that hath the steerage of my course
 Direct my sail. (*Ibid.*, 11. 112-113)

と *grace will* にまかせることをはっきり言っていたのであった。*grace will* をもって行動したら Romeo も Juliet も長いことつづく両家の宿怨を取り除くことさえ出来たであろう。いや何よりも二人は、運命の星の働きを変えて、結ばれたことであろう。残念ながら二人は、僧 Lawrence の言葉でいえば、*rude will* でもって、ただ本能的に、衝動的に、行動したものだから、直線的に破滅へと進んで行くより外なかったのであって、結果的には運命の星の働きを変えることが出来なかったということになるのであった。

それ故、Romeo も Juliet も *rude will* にもとずいて、無分別に、性急に、本能的に行動したために、運命によるよりも自分達自身が悲劇の原因をつくり出し、自分達自身がその結果を背負ったのだとさえ言えるように思うのである。

(昭和56年5月18日受理)

(註)

- (1) *The New Shakespeare : Romeo and Juliet*, Cambridge Univ. Press, Pp. xvii (1972)
- (2) P・ミルワード著、安西徹雄訳：シェイクスピア研究入門，中央新書，昭52，71頁
- (3) イギリス・ルネサンス——詩と演劇，小津次郎教授還暦記念論集，紀伊国屋書店，1980，1頁～20頁
- (4) 日本シェイクスピア協会編：シェイクスピア案内，研究社，昭39，81頁～104頁
- (5) P・ミルワード著：シェイクスピア研究入門，72頁